

近代を装う

——『当世書生氣質』と衣装、そして未完の『紳士気質』

藤澤博康

明治期の書生たちの写真

『早稲田百年』という早稲田大学開学百周年を寿ぐ書物を開くと、明治の書生たちの集合写真二枚をわれわれは目にすることができる。¹以下参照する二枚の写真は早稲田大学の前身、東京専門学校での第一回と第四回の卒業記念写真であるらしい。まず、(図一)を見てみよう。

白い洋館風の建物の前で、羽織袴を着て腕を腰に当てて肩を怒らせる者、着流のまま正面を睨みつける者など、バンカラを校風とする早稲田大学の先駆けとなる人々の勇猛たる姿が記録されている。この写真について、全員が和装であることをここでは、銘記しておいていただきたい。

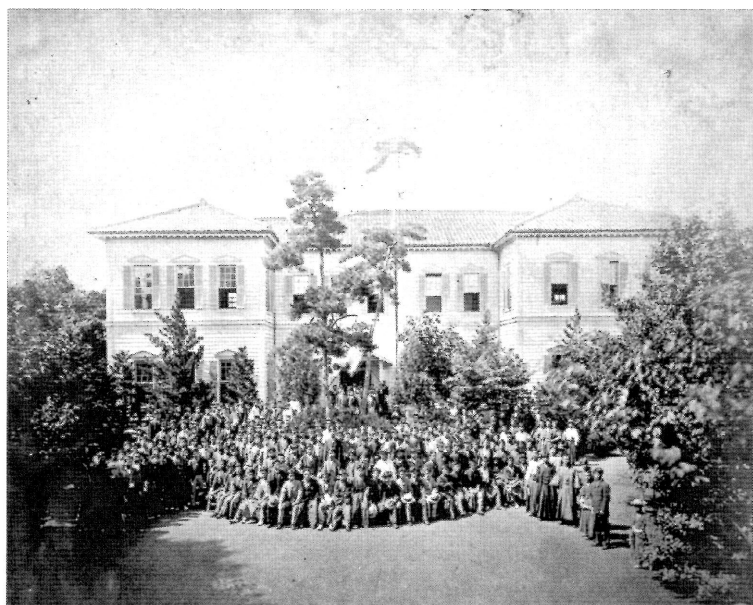
また、もう一枚の写真、(図二)も東京専門学校の前で、書生たちの卒業していく姿を記録した第四回卒業記念写真であ

る。

これら二葉の写真を見比べると、そこには衣装の面で大きな変化が見て取れる。偶然という要素も否定できないが、一枚目の写真から二枚目の写真へと移行するわずか三年間に書生たちの洋服着用率が明らかに上昇している。²これら写真の比較を通して、書生が身につける衣装に何がしかの変化が起こりつつあったことは確かである。それは、服装の洋装化という明治十年代後半に起こった現象であった。これらの写真は、明治期の人々、とりわけ書生たちの衣装をめぐる、ある着実な変化を記録している。そして、これら二枚の写真のちょうど間隙を縫って明治一八年（一八八五年）六月から翌年一月にかけて出版されたのが、本論で論じようとする坪内逍遙の『当世書生氣質』であった。



(圖一) 東京専門学校第一回卒業記念写真 明治一七年(一八八四年)
七月 早稲田大学史資料センター所蔵



(圖二) 東京専門学校第四回卒業記念写真 明治二〇年(一八八七年)
七月 早稲田大学史資料センター所蔵

『小説神髓』から『当世書生氣質』へ

『当世書生氣質』とほぼ同時期に出版された『小説神髓』（明治一八年九月—一九年四月）において、東京大学文学士坪内雄蔵こと坪内逍遙が勸善懲惡に基づく曲亭馬琴に代表される江戸戯作文学の伝統を批判し、写実を重んじた西洋小説の手法を称揚した事実はすでに人口に膾炙されている。ところが、実際に写実を重んじることによって、逍遙が自らの小説理論を実践しようとした『当世書生氣質』の中で写実の技法がどのように実践されているかという問題については、まともな論考は発表されていないように思われる。本論において、逍遙が衣装に特別な注意を払い、その写実によって登場人物の性格を描き分けようとしていることは興味深い事実である。

ただ、調査を続ける過程において、『当世書生氣質』と衣装という問題を設定した場合、単に写実の技法を論じるだけでは十分でないことも次第に明らかになってきた。なぜなら、小説を書く上で写実を重視しながらも、逍遙は登場人物の表層をきめ細かく記述するだけでは満足しないからだ。小説家は表層（＝皮相）を描くだけでは不十分で、描く対象の「骨髓を穿つ」必要があると逍遙は『小説神髓』において説く。

……よしや人情を写せばとて、その皮相のみを写したるものは、未だ之れを真の小説といふべからず。その骨髓を穿つに及び、はじめて小説の小説たるを見るなり。和漢に名

ある稗官者流は、ひたすら脚色の皮相にとどまるを拙しとして、深くその骨髓に入らむことを力めたりしも、主腦となすべき人情をば皮相に写して足れりとせり。豈に憾むべきことならずや。（五二）^三

逍遙にとって、小説とはあくまでも架空の登場人物を用いて構成するものであるが、その人物がまるで実際に存在するかのような人物にまで昇華され、その人物の「骨髓」まで明らかになつていなければならないと言うのである。

また、逍遙は、小説は人を楽しませ、なおかつ人を「改良」する必要を主張するとともに、小説の果たすべき機能として、各時代の風俗を記述することも重視していた。『小説神髓』の時代小説と実際の歴史を述べた著作（逍遙はこれを正史と呼んでいる）の違いを述べた箇所、逍遙は、正史は瑣末なエピソードを細かく描写できないのに対して、逍遙の言葉を借りると、小説であれば「脱漏を補ふ」（一三九）ことができる主張している。正史であれば、たとえば「ナポレオン一世がジョセフィン皇后と夕餐を終えた」と事実を記述して満足するところを、小説はジョセフィン皇后が日に涙を浮かべる仕草や、談話が長引いたために珈琲が冷める様子を描くことでその場の情感を伝えることができる述べている。

小説の主眼について、同じく『小説神髓』の中で「小説の主腦は人情なり、世態風俗これに次ぐ」（四二）と世態風俗より

も人情に優先権を与えた逍遥ではあるが、「かかる瑣細なる事実をさえ限なく写し出すことは、正史の成し得ざるところにして、小説の得意とする所になむ」(一六三)と発言した後、時代物語の中で描かれた風習や衣装について、逍遥は次のように述べている。

その他風習、衣裳の如きも、正史中には画くが如くに写し出すこと難かるべし。小説家にして之れを写すきははめて便宜の多かるのみか、活風俗史をなすに近かり。スコット翁の如きは最も時代小説の髓を得たるものなり。馬琴、京伝の如きはその名は時代物語の作者なれども、その実世話物の作者に近かり。蓋し馬琴らの叙する所は、当時の風俗、衣裳にはあらで、寛永以降の風俗をば「ほんやり」叙したるに外ならねばなり。(一六三)^四

ここでの議論は時代小説と正史における風俗、衣装の描写の果たす役割に関するものであるという限定がつくものの、この箇所は逍遥の小説とそれが描く風俗と衣装についての考えが表明された重要な一節であると思われる。また、『小説神髓』での馬琴の勸懲主義に対する批判は有名であるが、この一節の中で逍遥は、風習や衣装についての描き方の点でもイギリスのウォルター・スコットの写実を賞賛する反面、馬琴や京伝のそれを「寛永以降の風俗をば「ほんやり」叙したるに外ならねばなり」

と切り捨てている。

以上、見てきたように逍遥は小説を世態、風俗を写し出すことで人間の内実までも描き出すものであると同時に、それが後に歴史家が見て風俗史の貴重な資料にもなりうるべきであると構想していたと推察できる。では、実際に『当世書生氣質』と衣装について論じる場合どのような中心的なテーマを設定できるだろうか。本論ではテキストを分析した結果、論じる大きな対象として、血縁と財産の継承の証としての家紋、書生の情欲を抑制する制度としての衣装、衣装と風俗改良運動、理想像としての「紳士」の以上四点を設定してみたい。そして、これら四つの論点にいくつか補足的な項目をつけ加えながら、『当世書生氣質』と衣装について以下の部分で考察を深めてみたい。

血縁と財産の継承の証としての家紋

『当世書生氣質』の物語は、書生、小町田榮爾と芸妓田の次が再会し、身分の差にもかかわらず恋に落ちる話を主筋としている。この中心となる話に、個性豊かな書生たちの生活が、さながら群像劇のように活写されるのが『当世書生氣質』の物語の構造上の特徴となっている。このような小説としての構造を頭に入れた上で、『当世書生氣質』と衣装を論じる際、小説の序盤で問題になってくるのは、上野戦争によって離ればなれになった書生、守山友芳が、妹である田の次ことお芳と、父から譲り受けた羽織についた家紋によって再会する筋書きである。

友人の洋行の送別会のために正装をする必要が生じた倉瀬蓮作は、衣装を借りるために守山の家を訪問する。友人の依頼を承諾する守山が、倉瀬に貸したのは、父譲りの黒緞の羽織であった。親譲りの品であるゆえ、くたびれていることを認める守山の発言を受けて、倉瀬はその羽織の紋について言及する。

倉「だうりで、この紋が団子然と、大きいと思つたヨ。しかし、五つ紋でないうちが有難い。」トいひつつ紋をつくづく見て、倉「オヤオヤ君の紋はよほど珍奇しい紋だネエ。」守「珍しいはずさ。外に類なしだものを。」倉「これヤア、何という紋だらう。三つ鱗が、抱き合つてゐるんだから、仮に命けて、抱き鱗かネ。」守「マアそんな事だらうヨ。」倉「なんにしろ、馬琴の小説かなにかなら、古事来歴がありさうな紋だ。」(三九)

上の会話で登場する「三つ鱗」については『日本家紋大図鑑』を監修した本田總一郎によれば、鱗紋とは魚の鱗という意味以外に「三角模様として用いられていたものであり、また、北条時政が子孫の繁栄を祈つた満願の夜、大蛇が現われ、その後鱗が3枚落ちていたということから三つ鱗を旗印に使つた」という。^五 今回の調査では、残念ながら三つ鱗が「抱き合」つた、後に別名「六鱗」と呼ばれる、三つ鱗が向かい合った家紋の具体例を見つけることはできなかった。ただ、上の引

用において守山が、逍遙が『小説神髓』で批判した馬琴の小説に言及していることは興味深い。なぜなら、逍遙は馬琴の勧善懲悪を批判しつつも、『里見八犬伝』で伏姫が里見の人間であることが家紋によって発覚する筋立てなどを頭において守山に発言させていると推測できるからである。たしかに、おそらく簡単には見つけられないめずらしい「六鱗」を守山家の家紋とすることによって、『当世書生気質』ではその紋のついた人物が守山家に関係した人物であることを特定しやすい設定になっている。この設定があるからこそ、『当世書生気質』では顔鳥という娼妓が六鱗のついた、もとは田の次こと、守山友定の実の妹、お芳の短刀を新造のお秀から入手し、上野戦争で離別したお芳になりすまして守山家の一員になろうとする筋骨きの成立を可能にしている。すなわち、逍遙は小説の革新を片方で説きながら、従来からある戯作文学で用いられていた常套手段を、幾分修正を加えながら『当世書生気質』において用いているのである。

ここで守山家に受け継がれている羽織と、それについて家紋のもつ意味についてまとめておこう。小説の刷新を実践しようとした『当世書生気質』においても完全に戯作文学の伝統とは縁を切ることはできず、守山家の家紋をめぐる騒動には旧来の家という制度がもっていた財産継承の証として家紋が利用されている。また、羽織の父親からの継承についても、きわめて日本的な血縁の継承を暗示している。ただ、手法としての家紋に

よる登場人物の人物特定も、顔鳥とお秀という登場人物を介入させることによって複雑化されていることは確かである。

書生の情欲を抑制する制度としての衣装

家紋をめぐる騒動を一方で描きながら、逍遙は『当世書生氣質』において洋装化の波が押し寄せてきた明治初期の書生たちの、その波に対する反応を記録している。ただ、その描く対象となった書生はたしかにエリートの候補であり、将来国家を支えていく役割を期待されてはいるものの、同時に彼らは経済的な観点から見ると、親の財力に多くを頼り、自由な時間を有してながらも、少し贅沢な生活を送ると、途端に立ち行かなくなってしまう経済的に不安定な集団でもあった。『当世書生氣質』ではいつものことながら、小説の中盤にさしかかると物語の語り手が突如として表れて、同時代の風俗について苦言を述べ始めるが、その矛先が特に親に依存した書生へと向けられる。

人間終極の目的は快樂なり。お愉快筋が目的なりとは、今の学者の唱ふる所。もしこの節をもて是なりとせば、文明といひ開化といふも、皆この筋の媒介にて、世が段々に開けゆけば、便利な物も次第にふえ、重宝な事もますます訳なり。さすれば未開の時代と違ひて、御愉快筋の機械媒介、数限りもなく備はるから、自然と世間が奢侈を好みて、三

度の食物臨時の宴会、住居の結構調度まで、とかく贅沢になりふり恰好、我劣らじと飾りたつるも、余裕があつての道楽なら、げに御もつともな事なれども、素寒貧な書生の身分で不料簡な外容坊三昧。五十銭の量附に、一円の麦藁帽子、四円以上の博多の帯がキウキウと鳴くを喜べども、臍栗をうばひとられたお袋が、蔭で打泣くの物を物とも思わず、乱暴に被ならした上布の葛衣が、日々皺になるを嫌ふといへども、年々歳々送金する、親父の額の皺、ふゆるを厭はず、未熟な書生はこうでもなければ、ちと学問が出来てくると、忽地自分極の木の葉天狗。自惚の鼻は高けれども、根性は矢張本の木阿弥。(八一)

「外容坊三昧」という言葉が代表するように、当時の不良書生には親から送金された仕送りを服装のために使ってしまったりして放蕩の限りを尽くす学生もいたようである。^六さらに、おしなべて『当世書生氣質』に登場する書生たちは、若く、精力が漲っているばかりに、さまざまな面で情欲の虜となる危険性をはらんでいる。その意味で当時の教育制度がさまざまな規制を設けていることが、『当世書生氣質』を読んでいると感得できる。一つは、学問である。知性の欠如は感情の暴発を招き、立身出世の妨げとなる。書生は学問に励むべしとする圧力がこの作品には随所に見受けられる。二つ目に、体育の果たす効用がある。体育も書生の情欲を抑制する制度として機能している

ことが書生たちの会話を通して感じ取ることが出来る。書生は運動に励み、過剰な欲を発散させるべしというわけである。最後にこれがかつとも学生の「外容坊主義」を助長させている要素と思われる、女性の気を惹きたいという欲求を指摘できる。それを規制する制度として、書生の着る衣装についての規制がこの作品では顕著である。

衣装を放奢にすることの弊害として、『当世書生氣質』で述べられるのは、書生が女性にもてたいがために衣装に金を使い、学問に身が入らず、結局人生で一大事をなすことができない危険性があげられている。このような発想から、衣装は外面から内面を抑制する手段であり、若い書生の自由奔放な情欲を抑制するには、衣装の面でも規制を加える必要があると考えられていたことがわかる。

野「君なんぞは外容主義だからどうも不可。けだし女に惚れられようといふ野心があるからだ。止たまへ、到底だめだから、娼妓でも芸妓でも、金のある方へ転ぶ世の中だ。よほど古風な奇人でなけりやア、いくら容姿が佳からというて、寒書生にやア惚れはせぬぞウ。」（八八）

外見にこだわりの、女性の目を惹こうする書生の態度は、『当世書生氣質』では、批判もしくは嘲笑の対象となっている。

龍陽主義

さまざまな主義主張をもった書生を描いた『当世書生氣質』では、女性にうつつを抜かし、学業に身が入らない学生をきびしく批判する勢力がいる。その代表的な例が、典型的なマツチヨ学生桐山と、その腰巾着とも言うべき須河である。桐山は「尻のあたりの赤くなつた白地の単衣を被て、白木綿の尻子をまきつけ、腕まくりをしたる容体、見たところからして強そうなり」（二二六）と評されるように、体躯も大きく腕に覚えのある学生である。友人の買ってきた西瓜をナイフがないからといって、拳骨で叩き割るような豪快さを彼は合わせもっている。その桐山に常に追従しているのが須河で、硬派な二人が交わす会話は、軟派な書生たちを糾弾する典型的なものと言えるが、どこかピン트가外れており、この小説に喜劇的な色彩をつけ加えるものとなっている。

桐「とにかく女子と交際するは、男子をして文弱に流れしむる原因ぢや。然らばどうしたら女子を遠ざくる事ができるかといふに、今いうた通り威厳を保つのが上策ぢや。而して威厳を保つには、専ら腕力を研いてなア、鹿服を着するが肝要ぢやぞ。腕力の裏面の利益は、すなはちこの点にありといふべしぢやワイ。」須「ヒヤヒヤ。そこで君は龍陽主義を主張するぢやな。」桐「女色に溺るるよりは龍陽に溺るるほうがまだえいワイ。第一互に智力を交換するこ

とも出来るしなア、かつは将来の予望を語りあうて、大志を要請するといふ利益もあるから。」(一三一—一三二)

いから、学生だけではどうか洋服にしてしまひたいネエ。」
倉「我輩も実はその説だテ。……」(八八)

この引用で注目したのは、「龍陽主義」である。桐山は女性と交際して学問が疎かになるくらいなら、一層のこと男色を意味する「龍陽主義」の効用すら推奨している。これらのやり取りから、明治初期の男子書生たちの間に潜在的に存在していた同性愛的空間をわれわれは確認できる。

学生服論

「教育機関としては、なかなか「龍陽主義」を推奨して男子書生たちの気持ちに学問から逸れることを防ぐわけにはいかない。そこで、公の機関として学生の服装になんらかの規制を試みる場合に効果的なのは、学生服であった。実際、『当世書生気質』においても、学生服の効用について書生たちが意見を交換する場面が収録されている。書生の守山と倉瀬は洋装の義務化をめぐって、以下のような会話を交わしている。

守「……ダガ、倉瀬、学校の気風はよほど替わつたネ。この頃ぢゃア、先刻から気をつけて見るに、出入ともに袴姿だネ。我輩がある頃と違って、被流連なんぞ一個も見えない。全体被流しという容姿は、日本でも略式だから、実に見つともない卑陋な姿だテ。品柄は粗末でもい

『当世書生気質』が出版され始めた少し後、すなわち明治十九年に東京帝国大学では学生の制服着用が義務付けられている。⁷近代化にあたって高等教育制度の面でも、「被流」のような「略式」の衣装を纏い、「卑陋」な姿を教場に曝す態度は慎むべきであるという考えが支配的になろうとしていた。おそらく、『当世書生気質』もこのような学生服論の是非をめぐる議論の中から生まれてきた小説であると言える。

衣装と風俗改良運動

桐山の説く「龍陽主義」は別として、学生服の学生への強要も時代の大きな流れとしては、風俗を改良しようという明治の風俗改良運動の亜流に属すると言えるかもしれない。外山正一がミシガン大学でハーバート・スペンサー流の社会ダーウィニズムの洗礼を受けて帰国し、東京大学で地位を固めるとともに、『新体詩抄』の執筆者の一人に名を連ねたりしていた時代のことである。どこか飄々とした雰囲気と漂わせる遣言でも、当時の劇的な社会の変化には敏感にならざるをえなかったのではないだろうか。『当世書生気質』の語り手は、風俗改良の説が流布される時代にあつて以下のような嘆息をもらしている。

ちかごろ風俗改良の説盛んに興りて、上は婦人たちの結髪
の風より、下は日本下駄の不便利まで、人のあげつらふ世
の中とぞなりける。まことや風俗は人情の表徴なり。風俗
の異ようなるは、人情の異ようなるを示す。文明相競へる
今日にありては、風俗改良の事、実に等閑に身すぐるにあ
らず。目下有志者が相つとめて、衣裳その他をも改良なさ
んと、骨を折らるるのも故あることなり。されども人心の
さまざまなる、往々改良の主意をば誤り、ひたすら服装の
麗なるを排して、これを野蠻となし、これを未開と誹り、
無闇に美麗なる洋帽をいただき、滅多に高価なる洋服を被
り、質を八に置き、苦に洩を重ね、以て得色たがるしれも
もありけり。これあに滅法なる間違ひにあらずや。服装
の価貴き、元來文明の徴標にもあらねば、開化の招牌にも
なりがたかるべし。(二五一)

この引用で小説の語り手は、書生の衣装だけに留まらず、日本
人の服装が「麗服」から身にそぐわない借り物の服装へと変化
している傾向について警鐘を鳴らしている。では、明治の日本
人の理想とすべき衣装観はどこに求められるのであろうか。

外見と内面が調和した理想

……『ハムレット』におけるポローニアスの発言

この問いかけに対する回答の一つとして、同じく『当世書生

氣質』の語り手が、衣裳について言及している箇所がある。書
生たちの珍妙な衣装の記述が羅列される中、『当世書生氣質』
の話者は第十八回の冒頭の部分で明治初期の風俗について個人
的な意見を突然開陳し始める。

……畢竟恰好が第一なるゆゑ、甚だしき不平均は最も忌避
すべき事とぞ思はる。かく急所のみを大に飾りてその余を
漸々に儉約せば、容姿おのづから見易うして、自然にいや
みなども少なかるべし。これを要するに、性來の醜所短所
をのみ専ら飾りて、その余を大方にしておきても不可な
し。我國の俗が、粹な容姿などといふも、あるひは粹とす
べき所を探りて、其処のみいと巧に粧ふをいふか。いはゆ
る粹な人の粧服を見るに、衣服必ずしも高価にあらねど、
ただ何処ともなくイヤミ氣少なく、いとふさはしくも思は
るぞかし。英の伝奇家沙翁(シェークスピア)がかつて
台辞のうちにて、

「御身が囊懐に貯金あらば、あくまで高価の衣装を
求めてこれを身に纏ふもさまたげなれど、わがおろ
かしき妄想をば見すかさねぬやう粧ふべし。よしや
驕奢に粧へばとても、華奢にすぐるはいと醜し。け
だし衣装は動もすれば、その人品をば表すものゆ
ゑ、肚を見られぬ用心して、身に適ふやう粧ふべ
し。」云々

と綴りし文句はまことにこれ金を殺して美服を着する、野暮が頂門の一針なるべし。さはいへ翻してこれをいへば、衣裳は衣裳なり、肚は肚なり。(二五三)

シェイクスピアの代表作、『ハムレット』(Hamlet)のポローニアス(Polonius)がフランスに留学していた息子、レアティーズ(Laertes)が帰国した際に世間で生きて行く指針を与えている場面に登場する服装についての忠告を引用しながら、『当世書生気質』の語り手は、身につける衣装と、個人の「人品」がフランスが取れたものになることが理想的であることを改めて主張している。上の引用に含まれた『ハムレット』のポローニアスの発言に代表される外見と内面が調和した「中庸」の美德が、『当世書生気質』における衣装観の根幹を占めるものとなっているように思われる。

「粹な人」、「紳士」

以上見てきたように、洋装と和装の同居した珍妙な衣装を着て文明化されたような素振りをしている学生が多い中、上等な衣装を身に纏いながらも、内面がその外見に追いついていないという意識は、『当世書生気質』の底流に存在している。では、内面と外面が理想的に調和した状態とはどのような状態なのだろうか。このテキストでは、それに対する答えは明確には与えられていない。先に触れた、『ハムレット』への言及を含む

引用の中でさりげなく触れてある、「いはゆる粹な人の粧服」という表現には、逍遙が理想とした外見と内面の調和の取れた人物の衣装の典型が感じられる。大切なのは、内面と外面のバランスを取る絶妙の「感覚」(センス)なのである。

この「粹な人」という理想像に加えて、特に私が注目したいのは、継原という書生が言及している「文武兼備」した人物、すなわち「紳士」である。学問に打ち込むために、あえて女性に好かれまいよう無骨に振る舞うことを推奨する学生に対して、継原は以下のように応える。

……さういう卑屈な考へだから不可んよ。女子に好かるべき性質あつて、なほかつ乱れない人間なら、はじめて有為な人物だらうが、力めて嫌はれるやうにしてゐて、やつと情慾を忍ぶやうぢやア、到底大業はなしがたしだ。東洋でもむかしツから、文武兼備を良将だといふし、西洋でも武官制度成立以来は、武あつて文備なきを野なりといつて、大に卑しんでる訳ぢやアないか。紳士といふこたア取も直さず、文武兼備の人といふことさ。女に好かれると剣呑たから、威蔽を保つために武骨にするたア、あんまり自惚の極まつた話だ。(二五一)

ちなみに、原本では上の引用の「紳士」には「ゼントルメン」というふりがながつけてある。また、西洋の「武官制度」には

騎士道 (Chivalry) を意味する「シバリイ」と注記されている。たしかに、この引用には洋装についての言及は見られないが、内面と外面がともに充実した理想像として西洋型の「紳士」が提出されている。

さらに、この継原の発言に引き続いて、海外に留学をしている任那という書生の手紙を通して、イギリスのオックスフォード大学についての報告が書生たちに紹介される。「むかしは当大学の学生には、富家良家の子弟多く、を要するに当大学は紳士の子弟の一大 Hub の如き有様なりき。」(二八一) 任那のこの報告は、「二、三の小説を繙読」して得られた知識にすぎず、この小説の話者自身も、いずれ日本の大学もやり方次第ではオックスフォード大学に追いつけると主張する任那の見解を嘲笑とともに紹介している。しかし、「体操運動」を重要視し、「神経の過敏に過ぐるを防ぐ」のを重視するイギリス式の大学教育に一定の評価を見せている点は、継原の述べていた「文武兼備」の人物像と通底していると言える。

理想像としての紳士、そして未完の『紳士気質』

私を見る限り、任那の手紙を通して同窓の書生たちに伝える、オックスフォード大学に学ぶ「紳士の子弟」たちと肩を並べるような文武兼備の書生像は、『当世書生氣質』の中で提出されることはなかった。当初、十八巻をもって出版される予定であったこのテキストは、どういうわけか十七巻にして暴力的

なほどまでの唐突さとともに打ち切られる。

『当世書生氣質』が、『統当世書生氣質』の予告とともに中途半端なかたちで終わっている事実は、暗示的である。

作者幸ひに間暇を得なば、再び管城子をやとひひれて、
他日 『統当世書生氣質』一篇

を綴らんとす。件の統編には、小町田、守山、任那、倉瀬、お常、田の次、吉住、顔鳥らの後談をもあらはし、別に新人物をいださんとす。新人物は、主にして書生なり。旧人物は客にして紳士なるべし。故にこの統編の如きは、書生氣質兼紳士気質を以って見るべし。

(三〇二—三)

この引用から伺い知れるように、作者の構想段階では書生が成熟した存在として紳士となり、その姿を描くことが想定されていた。にもかかわらず、逍遙は「間暇を得な」かったのか、あるいは弟子格の二葉亭四迷の小説の才能に怯えをなして小説の筆を折ったのか、二度と『統当世書生氣質』もしくは『書生氣質兼紳士気質』を書くことはなかった。この逍遙の沈黙には、後の日本近代文学が抱えた重大な問題が内包されているように思われる。

それはさながら西洋文明を急ピッチで受入れ、科学立国を目指す、経済大国にはなったものの、その実、内面的には旧来の

日本的なものを依然として引きずるあまり内面と外面の絶妙な調和を果たしえなかった現代の日本人の姿を暗示しているかのようである。はたして日本文学は、逍遙が『当世書生氣質』で予告した『書生氣質兼紳士氣質』に匹敵するような文学を生み出したのか、一度検証してみる必要があるだろう。たとえば、情けない日本に成り果てたと憂いた三島由紀夫が、なぜあれほど肉体（＝衣装）を鍛え上げなければならなかったのかなど興味深いテーマはまだまだあるように思われる。ただ、今回本論で扱った『当世書生氣質』の段階では、近代という時代をかなりの無理をしながら、なんとか「装った」状態で留まっているように映る。特に、このテキストでの「紳士」の不在は、その典型的な証左である。

注

本論は平成一九年一月一〇日に近畿大学文芸学部で開催された、日本比較文学会第四三回関西大会にて行われたシンポジウム、「変革期の坪内逍遙」で筆者が「近代を装う——『当世書生氣質』と衣装」と題して発表した原稿を基にしている。当日本ネラーとして参加された松村昌家、柏木隆雄、仙葉豊各先生は当然のことながら、シンポジウム終了後多くの比較文学会関西支部会員の方々と交わした議論は、拙論を書く上で多に参考にさせていただいた。この場をお借りして、謝意を表したい。

一 早稲田大学百年史編纂委員会『早稲田百年』（早稲田大学印刷所、一九七六年）二八一—九、三二—三頁。現在、『早稲田百年』に収録された写真は、早稲田大学大学史資料センターによってデジタル資料としてネット上で公開されている。本論にこれらの写真を掲載することを許可して下さった、早稲田大学大学史資料センターに感謝したい。

二 『洋服・散髪・脱刀——服制の明治維新』（講談社、二〇一〇年）で刑部芳則は、慶応義塾大学の学生たちは比較的早い段階（明治一六年頃）から洋服を着用していた事実を指摘した後、「慶応義塾大学とは対照的に、明治一五年に大隈重信が創設した東京専門学校（現在の早稲田大学）では、洋服姿はめずらしかった。多くは紺緋に黒紋付であり、稲穂を記章とした学帽の制定も、明治三十九（一九〇六）年まで待たなければならぬ」と述べているが、(図2)を見る限り、東京専門学校（現在の早稲田大学）の着用率もある程度高かったことがこの写真から推察でき

る。

三 坪内逍遙の『小説神髓』からの引用は、すべて二〇一〇年に改訂版が出た岩波文庫版に拠るものとし、引用の末尾にページ数のみを示す。以下同じ。本来ならば、決定版とも言うべき『逍遙選集』から引用すべきところであるが、一般読者を想定した場合、表記がより平明で、しかも入手し

やすい岩波文庫版がふさわしいと判断した。この判断は、本論で逍遙の著作として『小説神髓』以外に本論で論じる中心的なテクスト、『当世書生氣質』を引用する際にも当てはまる。

四 坪内逍遙の『当世書生氣質』からの引用は、すべて二〇〇六年に改訂版が出た岩波文庫版に拠るものとし、引用の末尾にページ数のみを示す。以下同じ。

五 本田總一郎監修『日本家紋大図鑑』（梧桐書院、二〇〇二年）四〇二頁。

また、同書同頁に収録されていた、三鱗を(図三)として引用しておく。

(図三)



六 東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史——部局史4』（東京大学出版会、一九八七年）二〇八頁に大学生

七 の制服着用の義務化についての詳細が記されている。

実例として、『当世書生氣質』に登場する放蕩書生、野々口精作は、後に黄熱病や梅毒の研究で世界的に有名になる細菌学者、野口英世の放蕩ぶりをモデルにしているという説がある。野口の書生時代の放蕩ぶりは、有名なものであった。